

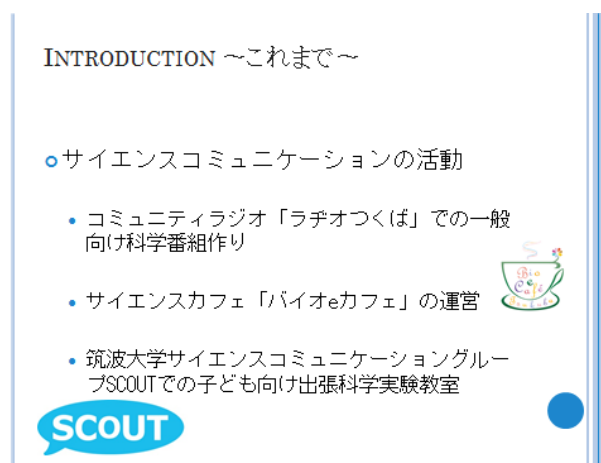
学生交流学際融合教育セミナーに参加して

鈴木美慧¹

今回は平成 23 年 10 月の学生交流学際融合教育セミナーについてご報告します。

1. Introduction ～セミナー参加まで～ (スライド 1,2)

私の「これまで」について簡単にご紹介したいと思います。筑波大学に入学してからの 4 年間、サイエンスコミュニケーションに重きを置いて活動してきました。まずは、開局して 3 年経ったコミュニティラジオ「ラヂオつくば」で開局後 2 年間、一般向け科学番組作りに携わりました。また、大学 1 年生の時、サイエンスカフェ「バイオ e カフェ」の運営にも携わりました。最近では、筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT で子供向け出張科学実験教室のプログラムを作っています。



スライド 1 Introduction ～これまで～

これらのサイエンスコミュニケーション活動を通して私が感じた課題が2つありました。一つ、サイエンスの情報をより正確に理解してもらうためにどう伝えるのが望ましいのか。二つ、それぞれのコミュニティに合わせたサイエンスコミュニケーションをどのように行うべきか。ラジオだったらリスナー、サイエンスカフェだったら参加者、子供向け科学実験教室だったら小さい子供たちです。それぞれのコミュニティによって科学への理解度、科学に対するバックグラウンドがまったく異なります。その彼らと一緒にサイエンスをより楽しく、そしてその理解を納得に繋げるにはどのように行動していったらいいか、これが、私が大学 4 年目にしてぶち当たった課題です。

¹筑波大学生物学類在学

INTRODUCTION ～見つかった課題～

- サイエンスの情報をより正確に理解してもらうためにどう伝えるか。
- それぞれのコミュニティに合わせたサイエンスコミュニケーションをどのように行うか。

スライド 2 Introduction ～見つかった課題～

2. Action ～セミナーへの参加～ (スライド 3)

学生交流学際融合教育セミナーは、大阪大学、早稲田大学、筑波大学の学生が参加するので、これはいい機会だと思いました。この筑波から出て他の大学の学生と交流しようと思っても、陸の孤島の筑波ですから本当に難しいのです。さまざまなバックグラウンドの学生と学術的に交流したいと思った時には、こういうセミナーで共通の課題に対してみんなで一所懸命解決を考えていく時間の共有が必要だと感じました。大学院生が対象のこのセミナーにどうしても参加したいと白岩先生に相談したところ、「やっておいで」と許可をいただき、無事このセミナーに参加することができました。

ACTION ～セミナーへの参加～

- 学生交流学際融合教育セミナー
平成23年10月14、15日
ホテルコスモスクエア国際交流センター
主催:大阪大学学際融合教育研究センター



- 大阪大学、早稲田大学、筑波大学の学生が参加
- 多様なバックグラウンドの学生
- 共通の課題に対して短時間でまとめる力がつく

スライド 3 Action ～セミナーへの参加～

1) 課題への取り組み (スライド 4)

テーマは、「10年後を想像して持続可能な社会をつくるにはどのような科学技術が必要で、どのような社会システムが求められるだろうか」。この大テーマは、漠然としていて誰も答えが出

せません。私たちはグループに分かれて、この大テーマに基づいてディスカッションしました。持続可能とはどのような状態なのか？便利さがもたらすものは何か？科学技術はコミュニケーションを良好なものにするか？科学技術が発達したところで心の豊かさは何で測れるのか？

一泊二日のセミナーで私たちに与えられた制限時間は約10時間。夜8時から始めて徹夜です。でも、とても充実した10時間です。メディアコミュニケーションというのにふさわしく英語で自分の意見を述べるというとても貴重な機会を与えていただきました。

ACTION ～課題への取り組み～

- テーマ；10年後を想像して、持続可能な社会をつくるにはどのような科学技術が必要で、どのような社会システムが求められるだろうか。

持続可能とはどのような状態なのか？
便利さがもたらすものは何か？
科学技術はコミュニケーションを良好なものにするか？
心の豊かさは測れるのか？

制限時間は約10時間…

スライド4 Action ～課題への取り組み～

2) 白熱議論 (スライド5)

議論をする際、学生の意見の数だけホワイトボードにポストイットを張っていきます。1班5名で100個の意見を出すことを目標にして、“Food”, “Education”, “Health”, “Environment”についてそれぞれのバックグラウンドに基づいた意見を一人20個ずつ出していきました。意見を出すだけでなく、「自分たちの班はどこに目標をおいてどのようなまとめ方をするのか」「ここはこうした方がいい」「こんなふうに伝えないと参加者には伝わらないかもしれない」と、みんなで向き合いながら議論しました。科学だけでなく、社会学、政治学があり、同じ科学技術という単語をとっても見方はまったく異なります。まず、同じチームの学生同士でコミュニケーションして、そして情報の共有というステップが必要でした。

ACTION ～白熱議論～



Food

Educ at ion

Health

Envi ronment



スライド 5 Action ～白熱議論～

3) WHAT IS THE FUTURE OF OUR WORLD? (スライド 6)

私たちの班が出した結論をご紹介します。学生の数だけ「10年後の世界」の数があり、8班それぞれの結論がありました。私たちの班が考えたのは、10年後の世界には、第一に全世界的コミュニケーションを築くシステムが必要だということ。私たちが住んでいる日本だけでなく、ナイジェリアやアメリカ、国の大きさに関わらず、お互いの顔が見えてお互いが感じられるようなシステムが必要なのではないかという結論です。最近インターネットではソーシャルネットワークサービスが充実してきました。フェイスブックを通じて先生方とコミュニケーションできる学生が増えてきました。でも、相手の顔を見てダイレクトにつながるようなシステムがこれからの私たちに必要なのではないかと、そう考えています。

第二にグローバルな問題をグローバルで共有すること。グローバルな問題に関して私たちは、さまざまな情報ツールを使って知ることができます。でも、本当に現地の人たちと問題点を共有できているのでしょうか。第一の全世界的コミュニケーションシステムを構築できれば、ただ情報としてのグローバルな問題を、私たちは現地の人たちと本当に同じ感覚で共有できると考えました。

第三に、必要なときに必要なものを必要なヒトに。大量消費と言われる社会ですが、本当に私たちが今食べているものは、もしくは使っているものは必要でしょうか。本当にそれを必要とする人たちに届いているのでしょうか。そういう問題を考えた上で、私たちが行動を起こすときも必要なときに必要なものを必要なヒトに。もったいないという言葉も出てきたし、みんなですら必要ヒトに届けられるかというトランスポーティングのシステムを考えようという話になりました。でも、私たちの最終的な結論は、”THINK GLOBALLY, ACT LOCALLY” です。世界的な問題に関して考えることが大事です。そして、現地の人たちとその問題を共有することも大事です。でも、最初のアクションは私たちがこの一歩から始めなくては何も起こりません。私がこのセミナーに参加したことも一つのアクションです。このアクションを一人一つ起こして、そしてチームで一つ起こして、社会で一つ起こしてつなげることが次の未来につながることでと

思います。

WHAT IS THE FUTURE OF OUR WORLD?

- 10年後の世界…
全世界的コミュニケーションを築くシステム
globalな問題をglobalで共有する
必要なときに、必要なものを、必要なヒトに



THINK GOBALLY, ACT LOCALLY

スライド6 WHAT IS THE FUTURE OF OUR WORLD?

3. CONCLUSION ~セミナーを終えて~ (スライド7)

今回のセミナーで学んだ大きいポイントです。

“Share the future.” 未来を一緒に考える。

ここにいる筑波大学生、大阪大学生、早稲田大学生だけでなく、そこからさらに外の世界に、より多くの人と私たちの未来を考えていきたい。

“Imagine the future.” アイディアの想像から、創造へ。

アイディアを想像する、そしてそこから自分たちで創る創造へ。

“Take Action.” 周りを巻き込んで行動する。

想像だけでなく、行動しなくては私たちの社会は変わりません。

今年亡くなったスティーブ・ジョブズの動画をみんなで最初に見ました。“Stay Foolish, Stay Hungry.” 「突飛なアイディアを恐れずに出していこうよ。どんなに馬鹿にされたって、そのアイディアをもっと洗練していこうよ。」 大阪大学の学生が言っていた訳ですが、本当にその通りだと思いました。今考えていることがどんなに馬鹿げている、周りからは実現不可能だと言われても、私たちがそれを信じてそのアイディアを実現できると思って洗練していこうと思っていれば必ず実現するとスティーブは教えてくれたと思います。

CONCLUSION ～これから～

○Share the future.

- 未来と一緒に考える

○Imagine the future.

- アイディアの想像から、創造へ

○Take Action.

- 周りを巻き込んで行動する



Stay Foolish, Stay Hungry.

突飛なアイデアを恐れずに出す。
そのアイデアをもっと洗練していく。

IMAGINE
THE
FUTURE.

スライド7 CONCLUSION ～これから～

CONCLUSION ～見つかった答え～ (スライド8)

私が最初に思っていた疑問に対する「答え」です。

◆サイエンスの情報をより正確に理解してもらうためにどう伝えるか。

双方向のコミュニケーションが可能な場所作りが何より。このコミュニケーションは大学の授業のように先生が講義をし、私たちがノートを取るというものではありません。先生に私たちの意見を聞いてほしいし、先生は私たちが思っていることをダイレクトに聞きたいのです。そのコミュニケーションの場所は簡単には作れないかもしれません。ですが、分野を超えた、立場を超えた関係作りがまず何よりも必要ではないかと思いました。

◆それぞれのコミュニティに合わせたサイエンスコミュニケーションをどのように行うか。

そのコミュニティごとの需要を調査し、一緒に課題に取り組む姿勢を私たちは持たなくてはいけないと感じました。どんなに良い科学実験プログラムを作ったと思っても、子供たちがそれを通して「わかったぞ。楽しい。もう一回やりたい。」と思ってくれなかったら、その科学実験プログラムはまったく意味がないです。その子供たちが今何に興味があって、その子供たちにどういう絵と言葉を使って伝えたらわかってくれるか、一緒に考えてくれるか、そういう姿勢が必要なのではないでしょうか。それは子供たちだけでなく、サイエンスカフェの参加者、ラジオのリスナーのみなさん全員に当てはまることだと思います。

CONCLUSION ～見つかった答え～

- サイエンスの情報をより正確に理解してもらうためにどう伝えるか。
→双方向のコミュニケーションが可能な場所作り
- それぞれのコミュニティに合わせたサイエンスコミュニケーションをどのように行うか。
→そのコミュニティごとの需要を調査し、一緒に課題に取り組む姿勢

スライド8 CONCLUSION ～見つかった答え～

最後になりましたが、今回のセミナーを開催して下さった大阪大学の皆様、私の背中を押して下さった白岩先生、私のチームを率いて下さった Rakwal 先生、一緒に参加し時間を共有した学生のみんなにお礼を申し上げて終わりにしたいと思います。(スライド9)

謝辞

- 大阪大学学際融合教育研究センターの皆様
- 筑波大学白岩善博先生
- Randeep RAKWAL先生
- 一緒に参加し、時間を共有した学生のみんな



スライド9 謝辞